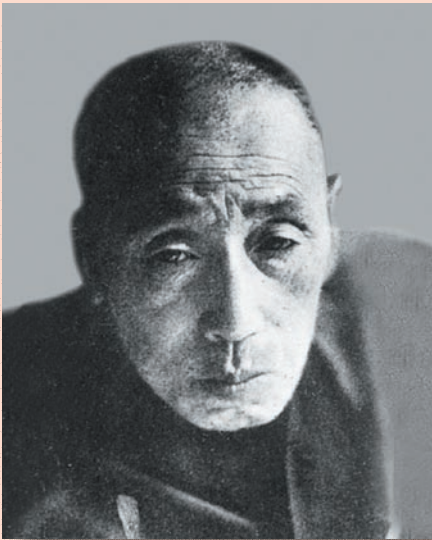


こ
だま
か
がい

児
玉
花
外

長門市
(1874～1943)



【著作】

『花外詩集』（明治37・金尾文淵堂）
『東京印象記』（明治44・金尾文淵堂）
『児玉花外詩集』（昭和18・文松堂書店）ほか

児玉花外は、白雲なびく駿河台：“の明治大学校歌の作詞者として知られ、『社会主義詩集』が日本最初の文学作品の発禁で一躍有名になった。また、『新声』詩壇等の選者として後進を指導、室生犀星、白鳥省吾らの詩人を世に出した。

花外はバイロンやバーンスなどに傾倒して詩作を始め、西川光次郎、片山潜らの影響で社会主義的関心を抱き、底辺に生きる人々に心を寄せ、その生活と社会の現実をうたった。当時多くの詩人が浪漫的情緒をうたう中で、かれの存在は注目値する。だが、詩人としての花外はほぼ明治の時代に終わっている。

花外は京都の生まれだが、成人後、故郷は山口県と語っていた。父精斎は山口県長門市の出身で、今も児玉家の墓などが残っている。

精斎は封建的因習に耐えられず、武士を捨てて上洛。苦学の末、洛中屈指の名医として一家を成す。それに反し、晩年の花外は酒に酔わねばうたえぬという不肖の子であったが、彼には断ち切ることが出来ない濃い父祖の血が流れていた。

大正十三年（一九二四）の春、花外は古びたバスケットに父の位牌を入れ、飄然と父祖の地を訪ねる。ここから各地の維新の志士の足跡を訪ね、多くの即興詩を『防長新聞』などに発表した。これがせめてもの父への、追善となったのであろう。

（文・桑原伸二）



『バイロン詩集』（児玉花外 訳）



（長門市大寧寺の詩碑）

青海島嶋は数々

みな男島

骨はあるぞよ侠骨が

日本海 どんと

怒濤が打ちよする

胸は度胸だ

やって来い

児玉花外 年譜

（提供・桑原伸二）

明治7（一八七四）年

明治12（一八七九）年

明治14（一八八一）年

明治19（一八八六）年

明治23（一八九〇）年

明治25（一八九二）年

明治27（一八九四）年

明治30（一八九七）年

明治32（一八九九）年

明治35（一九〇二）年

明治36（一九〇三）年

明治37（一九〇四）年

7月7日、京都に生まれる。本名は伝八。父は萩藩士（後、医師）、児玉精斎。母絹枝。

母絹枝が千代・伝八・伝作の幼い三姉弟を残して病死し、父精斎は翌年平野ひとと再婚。異母弟精造、異母妹千鶴江が生まれる。

京都市中京区高倉御池上ルの初音小学校に入学。父の医業は好調。恵まれた家庭で成長する。

同志社予備校に入学。校長新島襄の多大な感化を受ける。教科書を考えるよりは、自然を友として過ごすことが多く、賛美歌を唱和するも、その哀切なロマンチックな心情に心をひかれる。

新島襄の死に遭い、級友と共に雪中を若王子の墓地へ師の柩を担いで送る。同志社を去り、仙台の東華学校（同志社の分校）に入学。

東華学校廃校となり、札幌農学校に入学。新渡戸稲造の「フランス革命史」を聴き、感動。

上京。東京専門学校（早稲田大学の前身）文科に入学。バイロンに傾倒。北村透谷を愛し、自由奔放な学生生活の中に、回覧雑誌『葦（すみれ）』を発行して坪内逍遙の指導を受ける。

東京専門学校中退。京都に帰る。翌年、内村鑑三主宰の『東京独立雑誌』に詩を寄稿。

江村増枝と結婚（約一カ年で離婚）。『風月万象』（山本露葉・山田枯柳共著）を文学同志会より刊行。新進詩人として中央文壇に認められる。

大阪にて、小笠原誉至夫主幹『評論之評論』の記者となる。与謝野鉄幹・蒲原有明らと韻文明読会を結成。山梨県甲府市の『日刊やまなし』の記者となり、生活の資を得る。

大阪中之島公会堂における日本最初の社会主義大会に参加し、「大塩中斎先生の霊に告ぐる歌」を朗吟して好評を博す。社会主義図書部より『社会主義詩集』を出版。発禁の厄に遭う。

『花外詩集』を金尾文淵堂より刊行。本書は岩野泡鳴以下五十九名の発禁の厄の同情文が付録になっている。『新声』詩壇の選者となる。寄稿者に室生犀星・白鳥省吾らがいた。

明治38（一九〇五）年

明治40（一九〇七）年

明治42（一九〇九）年

明治44（一九一〇）年

大正2（一九一三）年

大正9（一九二〇）年

大正12（一九二三）年

大正13（一九二四）年

昭和2（一九二七）年

昭和9（一九三四）年

昭和11（一九三六）年

昭和12（一九三七）年

昭和18（一九四三）年

三一歳

三三歳

三五歳

三七歳

三九歳

四六歳

四九歳

五〇歳

五三歳

六〇歳

六二歳

六三歳

六九歳

『ゆく雲』を隆文館から刊行。その中の「馬上哀吟」が青年の愛誦詩となる。

詩集『天風魔帆』（平民書房）、訳詩集『バイロン詩集』（大学館）を刊行。

父精斎、東京田端の花外寓居で死去。享年79歳。翌年にかけて『東京印象記』（金尾文淵堂）。『紅噴随筆』（岡村盛花堂）等を刊行。

おさくと再婚し、麹町平河町に居を定めるが、三年後に妻死去。『秋田時事』の記者となる。

明治大学校歌「白雲なびく」を作詞。

関東大震災で手持ちの詩稿失い北海道に渡る。後に親交のあった大町桂月と青森県蕨温泉に滞在。『東奥日報』に詩を発表する。

初めて父祖の地山口県長門地方を訪ねる。三隅村の白藤董方（花外の甥）に寄寓し、後に湯本温泉の秋山六角堂に逗留。7月下旬帰郷するまで山口、萩、下関、岩国等の各地を遊歴し、多くの即興詩を作り『関門日日新聞』『防長新聞』に発表。その間、通小学校等の校歌を作詞。

山崎紫紅と合著『世界英雄歌 熱血男子』を朝日書房から刊行。

室生犀星・正富汪洋らの有志によって日比谷松本楼で花外還暦祝賀会開催。多発性右膝関節炎のため、東京帝国大学附属病院真鍋物療科に入院。（後に板橋の東京市養育院に移る）

明治大学の武田猛教授、学生マンドリンクラブを引率して帝大病院の花外を演奏見舞する。

花外詩碑。三百年の萩の花一たび揺れて血の勝利。が山口県萩市の志都岐神社境内に建つ。

数年前から、渡辺信覚師（静岡県伊豆上行院）の日蓮宗に帰依。河合醉名ら『児玉花外詩集』（文松堂書店）を刊行。

9月20日夜、辞世。信覚上人背をなで給ふ大慈愛有りがたし」と「渡辺国師彼岸の歌」を記す。

午後8時58分、急性腸疾患に因り死去。伊豆町大見山上行院に眠る。遺骨の一部は、長門市湯本の大寧寺境内の墓碑に埋葬。